

園長だより NO116

朝夕が若干、涼しくなってきたと感じる日があるものの、日中の暑さは尋常ではありません。先週の土日各地でイベントがありましたが熱中症での救急搬送が多くあったとニュースで流れていました。いつまで続く、この酷暑、多くの保育施設が昨今の暑さを懸念して運動会の日程を遅くしたのですが近い将来は冬近くに実施もありうるような気象の変化です。くれぐれも身体には気をつけて下さい。

保育園で大切にしていること

全国には星の数ほど保育施設があります。各園それぞれにこども、ひとり一人のことを考え保育内容に反映しています。この時期から来年、入園を考えている保護者の皆さんが園見学に訪れています。市内の園数もここ近年、待機児童解消に向け増えてきました。入園希望の方は、「必ず園見学にいった下さいね」と市窓口から優しい言葉がかけられます。保育園すべてが同じ規格で保育しているわけではありません。ところ変わればそれぞれ違いがあるのです。事務的なことはほぼ一緒でも実際のこどもの園生活は大きく異なることもあるのです。だからこそ見学に行ってくださいねと言葉をかけられるのです。

おおぞら保育園では現在進行形ですが大人主導型の保育からの脱却し子ども主体の保育

を目指しています。大人主導のから抜け出すことについては私の幼少時代の教育があります。学校では社会生活（社会）から何かしらの基準（物差し）で望ましいとされる、知識や技術を他者から教え（指示され）それに従い、学びという名の練習や訓練で獲得を目指さなくてはならなかった。当然教師はこどもの上に立ち、教える者と教えられる者との位置づけにありました。学校の教育下ではこども達は自らの力を発揮するどころではなかった。良い先生（こども達のことを考えて、こども達により添った学習内容）はみな肩身が狭かった時代とこどもながらに思っていました。だから私の育った時代の子どもたちは遊びの天才であった。好奇心、想像力あり、学校から一歩でたら解放感に浸り、地域すべてを遊び場と考え、仲間たちと手を加え、カスタマイズして、大人に支配されないこどもの居場所をつくっていた、こどもなりの秩序も生まれ、楽しく遊ぶための工夫がなされていた。裏山の基地づくり、工事現場の資材置き場、森、川、池、田、足で行けるところならどこでも出かけ日没まで遊びほうけていた。

幼稚園時代はというと1年保育しかない時代であったが遊ぶことよりもお稽古、お習い事が中心であった。小学校下からおりてきたことを時間割ごとに教えられ、やらされていた、かすかな記憶があります。

こどもがこどもらしくいられるのはいい。いつ、どんな時なのだろうかと思いつく頃は

いつも考えていた、当初、幼稚園で働き5歳児の担任をもっていた私、事あるごとに学年主任に悪たれをついていた、「なんでお母さんの日にプレゼントを作らなくてはならないのか」「そもそもひとり、ひとりの子どもがお母さんの存在についてどう思っているのか」そんな子ども理解がなくてはプレゼントどころではないと言い張った記憶がある。鼓笛隊も指導していた。半年近くも来る日も来る日も練習した。指揮や大太鼓、小太鼓など主要の楽器を担当するこどもは大人の会議により選抜されていた、こどもなりに楽器への憧れがある子どもいたが希望は叶えられない、大半の子はピアノであった。子どもの主体性を育むことからにはかけ離れ過ぎている。論外な教育であるとしか私には思えなかった。運動会で子どもたちがやり遂げると保護者は目を潤ませ感動したと伝えてくれる。私の目も涙で潤うがそれは、子ども達へ「おとなの身勝手に付き合ってくれて、ありがとう ごめんね」という気持ちがやり遂げた感動よりも勝っていた。数年かけて鼓笛隊の活動をなくした。

音楽教育として大々的に取り組んでいたが実は音楽嫌いを養成していたようなものであった。おおぞら保育園でもピアノの指導は無くした。大袈裟な合奏も無くした。子どもながらに楽しめるもの、心が通うもの、発達に見合うもの、大人も子どもも穏やかに取り組めるものとして「わらべうた」に取り組むように

なった。ピアノは小学1年生、鍵盤ハーモニカとして授業がなされる。どんな音がするかな？ 鍵盤をおさえる、音の高低がわかる、音を長く、短くきってみる、息の強さをかえてみるなど 初歩的なことから学んでいく、ドであそぼう ドレミの音であそぶことから始まる。1年生がこうなのに 4、5歳児がそれを飛び越えて学ばせている。こんなことが多くの保育施設で行われている、小学校の先取教育も度を越えている。

こどもらしくいられる大切さ

こどもがどうしたらこどもらしくなるのだろうか どのような時が子どもらしい時なのだろうか こどもの姿を見ていれば、子どものころに気持ちをよせていれば、わかります。遊んでいるときが子どもらしい時なんです。遊んでいるときがその子が今をしっかりと生きている時なんです。

大人がこどもの先を読み、あれして、これしてと環境を作り、おぜん立て、肝心な子どもの姿を置き去りにするような保育は避けたい。子どもありきから出発しなければならないと思っています。ただ未成熟なこどもですから育ちの過程で獲得する知識や技術、子どもの秩序づけた生活への学びや教えはあって当然です。遊びはこどもが主体になれる。やりたいな、やってみたいな、なりたいな、なってみたいな、遊びの中で自分が自分を育てていけるとそう思っています

（おおぞら保育園 園長 廣部信隆）



2025.9.4

